

## はじめに

二〇〇二年九月一七日。小泉純一郎氏が日本の総理としてはじめて北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）を電撃訪問、金正日国防委員長が日本人の拉致を認め、同年一〇月一五日、五人の被害者が帰国を果たした。

拉致被害者の蓮池薫さん、蓮池（旧姓・奥土）祐木子さん、地村保志さん、地村（旧姓・濱本）富貴恵さん、曾我ひとみさんが羽田空港に到着したとき、私は新橋にある日本テレビの情報番組「ザ・ワイド」のコメンテーターとしてスタジオにいた。羽田からは笛吹雅子アナウンサーが興奮した声で中継をしていた。到着した政府チャーター機から降りてくる五人の姿。出迎える家族たちのなかには横田滋さん、早紀江さんの姿もあった。のちに横田早紀江さんに聞いたことだが、最後にめぐみさんがタラップを降りてくるのではないかと、根拠もなく期待しながら見ていたという。

横田めぐみさんが拉致されたのは一九七七年一月一日。当時、一三歳だ。小泉訪朝のとき、私の次女は一三歳だった。私は羽田からの中継を見ながら思った。もし自分の娘がある日突然姿を消し、長い時間その原因もわからなかったなら、家族としてどんな不安と困惑のなかで生きるだろうか、と。しかも娘が姿を消したおよそ二〇年後に北朝鮮に拉致された可能性が指摘され、安否は不明のまま時間だけが過ぎていく。横田滋さん、早紀江さん、ふたりの弟さんたち、そしてほかの拉致被害者のご家族の絶望は他人の推測など受けつけないほど異質な世界なのだ。私はこの問題に関心を持ち、さまざまな運動に関わり、国会議員になってからは本会議、予算委員会、拉致問題特別委員会での質問、さらには二〇〇本近い質問主意書の提出などを行ってきた。

小泉訪朝と五人の拉致被害者の帰国は当時、アメリカや韓国をも驚かせた。帰国した被害者がもたらした情報と継続的な協議を通じ、北朝鮮から「死亡」と伝えられたほかの被害者の実態もやがて明らかになり、拉致問題は解決に向かって大きく動き出すかのように見えた。

あれから二〇年が過ぎた。

だが、その後の政権では進展が見られず、とくに第一次、第二次安倍晋三しんぞう政権では拉致問題



2002年10月15日、羽田空港に到着した政府チャーター機のタラップを降りる拉致被害者ら。写真=毎日新聞社提供

を「最重要課題」としながら、合計約九年間の在任中に成果はなく、いわゆる「やってる感」の演出に終始したというのが現実である。

小泉訪朝以降、北朝鮮側からこの間の日本はどう見えているのだろうか。対北朝鮮外交には独自の戦略が必要で、その基礎には「インテリジェンス」（情報収集と分析）がなければならぬ。しかし、日本の対北朝鮮「外交敗北」の原因は「ヒューミント」（人間を媒介とした諜報<sup>ちようほう</sup>）のない「官邸外交」にあった。いまなお、日本政府が依拠している脱北者だのみの情報は誤謬<sup>ごびゆう</sup>ばかりだ。

ここに日本政府が公式には存在を認めない「極秘文書」がある。

そこには拉致被害者がどのように事件に遭遇し、北朝鮮でどんな暮らしをしていたのかについての聞き取りが記録されており、いまだ知られていない被害者の人数を推測させる管理番号があったことも記されている。本書の第

一部ではこの文書を分析しながら、横田めぐみさんの消息をはじめ、これまで報道されていない事実を明らかにする。なお「極秘文書」の引用部分は〈 〉とする。

二〇〇四年にまとめられたこの文書は、安倍晋三元総理をはじめ多くの政府関係者が読んでおり、複数のメディアが入手している。これまで断片的な報道はあったものの、その全貌は現代史のなかにいまだ隠されたままである。関係者の高齢化が進むなか、この内容の概要を公開しないことは、むしろ拉致問題解決のために負の役割しか果たさない。北朝鮮に問うべきことがあるにもかかわらず、何もなかったかのように放置することははやできないからだ。

第二部では北朝鮮による拉致問題の解決に向かうための外交のあり方を論じ、さらに安倍政権以降の方針のどこに問題があったのかを示す。政権維持のために世論におもねる外交ではなく、外務省に蓄積された経験を活用したうえで、リーダーが目的達成のために判断を下す外交の基本に立ち戻らなければならない。